

8月9日（日）主日礼拝レジュメ

「散らされても、みことばの福音を伝えよう」 使徒の働き 8章1～4節

1節で短くサウロ、後のパウロが出てくる。

・「サウロは、ステパノを殺すことに賛成していた」⇒最高法院のメンバーの一人だったかもしれない。

・9章11節では、彼はタルソ人だった。

・ガラテヤ人への手紙1章13、14節「ユダヤ教のうちにあった、かつての私の生き方を、あなたがたはすでに聞いています。私は激しく神の教会を迫害し、それを滅ぼそうとしました。」と言っています。また私は、自分の同胞で同じ世代の多くの人に比べ、はるかにユダヤ教に進んでおり、先祖の伝承に人一倍熱心でした。」⇒彼は非常に厳格なシャンマイ派パリサイ人であった。シャンマイ派とは、言わば過激派右翼のようなパリサイ人。そのようなサウロがステパノと議論してもかみ合うはずもなく、彼はステパノを殺すことに賛成しました。

迫害の流れを私たちは見る。

4章21節ではペテロとヨハネに対して二人をさらに脅したうえで釈放。5章40節「使徒たちを呼び入れて、むちで打ち、イエスの名によって語ってはならないと命じたうえで釈放」。7章58～60節では、石打ちによる信徒であるステパノの殉教。8章1節では、エルサレム教会全体に対する激しい迫害が起こった。

「使徒たち以外はみな、ユダヤとサマリアの諸地方に散らされた。」とあるが、なぜ使徒たちはエルサレム教会にとどまったのか？理由の一つは、迫害はステパノに代表されるようなユダヤ人以外のクリスチャンに向けられたから。もしくは、使徒たちは自分たちの務めがあることを自覚し迫害の中でもなおエルサレム教会にとどまり続けたのかもしれない。

11章19, 20節を見ると、フェニキア、キプロス、アンティオキアにまで行き、1章8節のみことばがエルサレム教会に対する迫害を通して実現したとも言える。

舟喜信先生のことば「私たちがみこころを行うというよりも、私たちがみこころを行わせられるということがあるのではないか」（キリスト者が神を信じること）教会への迫害を通して人々は、神のみこころを行わせられた。

4節から、迫害により散らされたことは決してマイナスとはならず、むしろそれは広くみことばの福音を宣べ伝える機会となった。

5節からはピリポの働きが紹介されているが、福音の宣教の働きは、決して何ものも止めることができない。むしろ、宣教の働きを止めようとする者があれば、それをも乗り越えて宣教の働きはさらに進められるし、福音宣教を止めようとする働きをも主が用いて、さらに宣教の働きを推し進めようとする。

みことばの福音を伝える機会というのは、私たちの身近なところにもいくらでもあり、私たちがそのような機会を逃しているだけではないか。

2026年の年間目標が「祈りつつ 主のみわざを告げ知らせる」だが、そのようにして私たちも神のわざを告げ知らせたいと思わされるとともに、様々な機会に私たちが遣わされるところで、また何かのきっかけで出会う人々にみことばの福音を伝えることができる者でありたい。